



現於佛典之犬

開元 林 證 峯

●千支之說 相傳天皇氏所創。黃帝時大撓

氏始以天干(甲乙丙丁戊己庚辛壬癸)配地支(子丑寅卯辰巳午未申酉戌亥)。以作甲子。

如甲子乙丑丙寅等。俗所謂六十花甲子。凡紀年月日皆用之。

●十二屬 以動物十二種分配十二支。則子鼠。丑牛。寅虎。卯兔。辰龍。巳蛇。午馬。未羊。申猴。酉鷄。戌犬。亥猪。謂之十二屬。漢王充「論衡」已載此說。梁沈炯創十二節詩。屬之稱始著。蓋以人所生年定其所屬之動物也。

●佛教與十二獸 佛教亦有十二獸之名數。出「十二緣生經」(?)表示禽獸亦能行教化。唯十二屬之虎。十二獸則配以獅子。餘者皆同。然中國十二支非取自佛教。蓋基於列子

之三十六獸說歟。

●今年甲戌 今年歲次甲戌。屬犬。犬與狗通。故以現於佛典之犬爲題。聊集所見。用供莊嚴新年頭本誌之一端。

●獼猴經 經中有「獼猴經」一部。吳片支國優婆塞支謙所譯也。僅三頁。共七百二十三字。中以獼猴譬喻嫉妬自師者。曰。

從師受戒。還誹謗說師惡言者。非我行者。如是爲如獼猴還嚙其主。誹謗師道惡者。宿命本狗也。阿難問佛。狗罪畢入人道。何以故還嚙故大家也。佛語阿難。是狗得入人道。持佛戒法。有所教授。貪利供養。愚癡不解。便行謗說師。故墮五逆惡處。

獼狂大也。本經又云。作師情願。不能勤

たので、比丘はその議に同意し、早速實行しようといふことになつた。

比丘を左肩に擔つた鬼は、比丘を擯斥した僧團の所在地である町を直指して突進し、その町の虚空を右往左往した。これを仰いだ町の人々は、比丘の姿だけを見て喫驚し、「あの沙門はこの程擯斥せられたのではなかつたか。自由に虚空を歩ける、このやうな得道の人を追放するなんて、僧侶達の無恥も甚しい」との中合せが濃厚となり、到頭町の人々は寺に押寄せ、衆僧を散々呵責した上、擯斥した比丘を迎へて寺に入れ盛に供養を施した。供養を得る度にその幾分を鬼に與へることを比丘は決して忘れなかつた。だが、いつ迄も二人の幸福は續かなかつた。その後の或日、鬼は例の通り比丘を擔つて虚空を走つてゐると、虚空の中途ではつたり行き當つたのが毘沙門天王の官廳に於ける司令であつた。町の人々は胡魔化せても、この司令迄も胡魔化する能力を持合せてゐない鬼は、一見して極度に恐怖し、肩の比丘を打棄て、力の限り遁れ去つた。棄てられた比丘に、あはれ地上に墜落し、五體を碎き血を吐いて死んだ。

學。無有智慧。貪穢錢財穀帛。爲人行授戒法者。是各害戒比丘。濫開戒會及鼓舞教徒。過龍華功場之名利僧。皆屬此類也。

●狗得人法 又舊雜譬喻經云。

昔有沙門。晝夜誦經。有狗伏牀下。一心聽經。不復念食。如是積年。命盡居人形。生舍衛國中作女人。長大見沙門分衛便走。自持飯與沙門歡喜。後作比丘尼。得應真道。

此出「諸經要集」(卷二)。示聽法功德也。

今有作法身實踐論者。尚不知法身爲何物。而論名實證。其空論也必矣。如是學子。其不出參師聽法可乎。我恐其墮作狗身矣。悲夫。

●狗法 此狗譬喻末世比丘之怨嫉猜忌。出

「大寶積經」(八十八卷)。該經云。

當來末世後五百歲。自稱菩薩而行狗法。

彌勒。譬喻有狗。前至他家見後狗來。心生顛嫉嗔吠之。内心起想謂是我家。……

既起此想使生貪著。前至他家見後比丘。瞋目視之心生嫉恚。而起鬪諍互相誹謗。

言格甲比丘有如是過。乃至爲衣食故。讚歎如來智慧功德。令餘衆生於信仰。內自犯戒。惡欲惡行。

在來寺院之內諍皆起因於僧伽之行狗法。

出則背罵詈笑。阿諛隨人。人則暗心疑鬼。嫉妬同住。非但不能見賢思齊。尚且計謀放逐有爲。不然則割據小地方。爭奪徒衆。喜名住持。自任爲大和尚大法師。而實不過爲草地齋堂之替身。香火小廟之廟祝其野郎自大之狀。誠可笑亦可惡也。

●狗心 「大日經」(一)云。

云何狗心。謂得少分。以爲喜足。

本島僧伽中有受內地人布教師封爲布教員或布教師者。始則隨喜流淚。繼而趾高氣揚。其心即謂狗心歟。

●犬逐塊 見他人有好地位。而不察其所以

然。惟妄想欲效之。此則如犬逐塊不逐於人。

「涅槃經」(二十五)云。

一切凡夫。惟觀於果。不觀內緣。如犬逐塊不逐於人。

この物語は、道を行ずるものは、宜しく向ふ處を自ら修すべく、他の力に依頼してはならないといふことである。

◆修道多聞(兄弟好禪弟好多聞)

昔二人の兄弟あり、共に出家し共に學道してゐた。然るに兄が一心に道を修めて禪漢果を得たに反し、弟は實名の念に驅られ徒らに廣く學び多く聞かうとのみ焦つた。

兄は憂事に思つて、「人身は得ること難く、佛世には値ひ難いといふのに、お前は何の幸か人身を得てゐるのだから、時流に順びるやうな心懸は棄て、しまらうがよい」と曉すのであつたけれど、弟は「先づ廣く學んで經律論に通曉し、人に師たるの識見を具へてから、禪定に入らうと思ふ」として、折角の忠告に耳を藉さうとしなかつた。兄は更に世の無常を説いて聞かせ、人間の命は、出息入息の間にあるから、今日を忽にしては不可いと戒める。だが弟は故らに我意を徹し、教に従はうとはしなかつた。

間もなく弟は重い病氣に罹つた。醫者と云ふ醫者に診て貰たが、どの醫者も匙を投げ、治療の見込ない旨を宣言した。この期に及んで弟は兄に向ひ、「私は馬鹿者でし

愚癡不解、妄欲作大執事、不遂願則別立地方。以怨報德者。皆可謂逐塊之輩也。

●狗戒 昔天竺外道中有見狗死生天上者、

邪度狗法爲天上生因。效狗臥戶外食人糞。

謂之狗戒外道。「智度論」(二十二)云。

外道戒者。牛戒鹿戒狗戒。羅刹鬼戒。野戒。

如是等戒。智所不讚。空苦無善報。

不精佛法、唯知食菜者當謂牛戒外道。因牛

只喫草故。鳥內之行牛戒外道者。何其多哉。

●狗著獅子皮 同論(七十二)云。

如狗著獅子皮。諸獸見之雖怖。問處則

知是狗。

稱曰主持、其名也堂而且皇。及至聽其說

人能造佛性而不是人々公共一個佛性。則知

其不失從前爲庫頭之面目。不過以主持兩字

代替庫(卷土音吐庫)頭兩字耳。若是者當呼

之謂穿獅子皮之狗主持。

●狗隨井吠 同論(八十九)云。

如惡狗隨井自吠其影。水中無犬但有其

相。而生想心。投井而死。衆生亦如是。

四大和合故名爲身。因緣生識和合故動作言語。凡夫於中起人相。生變生患。起罪業。墮三惡道。

我見執著。不肯下心。凡他人有所說。則

謗爲謬謬太甚。不曉不了。誠如吠影之犬自

投井中也。

●狗子佛性 狗子有佛性或無性。係藉州和

尚所示公案。蓋用以打破有無執見也。出「五

燈會元」(四)。今錄之。

僧問。狗子還有佛性也無。師曰。無。

曰。上至諸佛下至螻蟻皆有佛性。狗子因

甚麼却無。師曰。爲伊有業識在。又僧問。

狗子還有佛性也無。師曰。有。曰。既有

因甚麼入這皮袋裡來。師曰。知而故犯。

證峯曰。欲知佛性法身者、須參透這箇無

門再來。不可妄作實證論。致壞我傳芳徒派

之面目。

●中秋犬吠 潭州石霜大善和尚。僧問如何

是佛法大意。師云。春日鷄鳴。僧云。學人

不會。師云。中秋犬吠。(見「景德傳燈錄」八)。

た。あなたの戒めを聞かず、道を悟らずに死なねばならぬ。私は何の道を行つていのか、今更途方に暮れておます」と先非を悔ひ、潜々と泣いたが、何うにもならず、終に逝つてしまつた。

兄は禪定に入つて、死んだ弟の行く先を覗きますと、長者の妻の臉に宿つたことを知つた。長者の家は幸ひ寺廟に近かつたので、兄は屢々長者の許へ訪れ、長者夫妻の善知識であることを求めた。これによつて生れ出る弟を濟度したいと思つたからだ。生れ出た弟が二歳になつた時、長者は布施を持して、わが子の弟子入りを申出で、

翌々四歳、乳母に抱かれて、初めて寺へと詣で来た。山上にある寺へ行くには、讀いた石道を辿らねばならなかつたが、疎忽な乳母は誤つて抱いてゐた子を石道に取落し、腦を割つて死なせてしまつた。

兄は復だ定に入り、弟の幼子が行着く先を觀得すると、まさしく大地獄に墮してゐる。そこで兄の歎しやう「萬事休す、地獄の苦は度し難いもので、諸難すら如何ともすることが出来ない程だ。まして私にあつては最早策の施しやうかないしと。

これは名聲にのみ心を馳せ、修禪を缺いたものは必ず惡道に墮するもので、父兄も救ふ事が出ない事を體驗したのである。